

どじないまなこにつつまるひび

晩秋の、やや冷える夜が明けた。陽光が暖かな風を伴って、透けた大窓の向こうから差し込んでくる。

「ここは緑の園。わが友フラワーが作った、緑の者たちの場所。ここが、いまの吾輩の城だ。」

「それじゃコツペ様、行ってくださいますか？」

朝の挨拶にやってきた若い妖精が、城から出てゆくを見送り終わると、あたりはまた静寂で満ちた。

誰もいない、緑の者たちの場所。今日も、吾輩はこの城で緑をただ見つめる。

わがまなこは閉じぬのだから。

「おはよう、コツペ」

静寂が訪れてしばらく後。ささやかな音と共に城の入り口が開き、ジョウロを片手した小柄な影が、吾

輩に声をかけてきた。愛すべきわが友、フラワーだ。

——おはよう。ほぼ問題ないが、奥のパイナップルに少々元気がない。気にかけてやって欲しい。

「パイナップルね。ちよつと冷えたかしら わかつたわ、見てみましょう」

吾輩の言葉に、わが友はシワだらけの顔を少し曇らせたが、すぐ頷くと奥へと向かった。これで、あの緑も元気になるだろう わが友の腕は、絶対だ。

「そういえば、つぼみの学校はもうすぐ学園祭だぞうよ」

奥から戻ってくると、わが友は吾輩の前に腰をおろしてそう言った。

朝のこの時間、友とふたりだけで過ごすときには、ここ半年ほどは別の者の影が見える。わが友の孫娘たち 新たなブリキアたちのことが多く語られ、吾輩はただそれを聞けばかりだ。

だが、それもよからう。少なくとも以前よりはずつ

3 とじないまなこにうつるひび

とましなのだ。ゆり君が心を枯らしてからしばらくは、見るに堪えぬほどであったからな

「部活動でファッションショーをやるんですって。私も、陽一やみずきさんと一緒に観に行くつもり。あなたも行く、コッペ？」

うん？

吾輩は、目を宙に浮かせ、しばらく考えてから答えた。

——わが友にしては珍しい冗談だな。

「そうかしら？ 私はね、コッペのからだが大丈夫なら、もう少し外へ出てほしいのよ」

輝かせたその目を見てると、知らぬ間に心の中で溜息をついてしまふ。

昔からではあるが、わが友には時々こつこつという無茶を言うクセがあるな。

——友の希望は叶えたいところだが、この身が動くだけで騒ぎの元というもの。無論、彼ら お主

の孫娘たちの危機とあらば、何処へなりと赴く。だが、いまは違ふ。

いたずら好きも、年相応に変えてゆくべきであるうに、変わらぬものだ

「そう？ なんと、ゆりちゃんまで出演するそうよ。あなたも楽しみじゃない？」

そう考えていた途中に聞こえたその言葉に、吾輩はしばし黙した。

あのゆり君が学園祭、ファッションショー、か。

——確かに、観たくないと言えば嘘になる。が

「が？」

——やはり吾輩は、ここから見つめよう。

顔のシワを笑顔に変えながら、わが友が透明な扉を開けて出て行く。吾輩はその姿も、この場所で見つめていた。

わがまなこは閉じぬのだから。

わが友が去ってからしばらく、この城に静寂が戻る。
暖かな光は緑を照らし、暖かな微風となって城の
中を行き交っている。

——ゆり君が、ファッションショー、か。

知らず、吾輩はつぶやいていた。音にならぬ声ゆ
え、近くに誰がいたとてわからぬだろうが。

頭に浮かぶのは、半耳の妖精のこと。吾輩の反対
を押し切つて、ゆり君につき従つて行った、わが小
さき友のこと。

(なにかあれば ゆりを、頼みます)

最後に交わした言葉が、頭をよぎる。だがその後、
吾輩になにができたものか。

——結局、吾輩ではお主の代わりにならなかつた

な、コロソ

閉じぬひとみの裏にも、過去は映る。あれはゆり
君がダークブリキアに敗れたとき。吾輩の手の中
で、声を殺して泣いていた小さな影。

吾輩の手は、頭を撫でるには大きすぎる。声は友
でないゆり君には届かぬ。吾輩が差し出せるとすれ
ば、この大きな身体だけだ。

なぜコロソンを助けてくれなかつたか、それでも偉
大な妖精か。そうやって、我輩を叩いて詰つて当
り散らしてくれば、少しは心も軽くなつただらう。

だが、叩く相手をすべて己の中に向けてしまった
ゆり君を、吾輩はただ、見守り続けるだけだった。

萎れた心の花を蘇えらせたのは、小さき友に託さ
れた吾輩ではない。若きブリキアたちと、そして
小さな友、それ自身の力だ。

吾輩は、何ひとつ力を貸してはおらぬ。この場所
で、ただその姿を見守り続けたのみ。

それとて吾輩に、閉じるまなこがないだけのこと。

——まったくもって、心の大樹で合わす顔もないな、吾輩は

(ボクたち妖精は、心の大樹から産まれて、心の大樹に還る。あなただってそうだろう?)

静寂に包まれ、やや緑に溶けこみかけていた吾輩の心に、言葉がよみがえった。

あれは、そう。心の大樹の前、ゆり君の前に現れた奇跡のわずか後。我輩の城を通りかかった、小さな友のことばだ。

——その通り。いずれ吾輩も、心の大樹へ還る。願わくば、わが友フラワーを見送ってからにしたいものだがな。

(ボクが、彼女を悲しませた姿を見せてしまったか

らだね)

相も変わらず、頭の良いことだ。もうすぐ大樹に還るといふのに。

——要らぬ世話だ。長くこの世界に居れば、色々もある。お主のことも、その内のひとつに過ぎぬ。

(あなたは 本心に、偉大な妖精だね)

——そうだ。今の世に一人しかおらぬわが友の、最後の願いすら叶えられぬ程度の『偉大な妖精』だ、我輩はな。

その瞬間、ふう、とひとつ溜息が聞こえた。

(それが正しいかどうかは、ボクのパートナーが教えてくれるよ。 それじゃ、本当にこれで最後だ)

——んむ。いずれ、心の大樹でな。コロソ。

目の前が過去から現在へと戻る中、ひとつの言葉だけが、頭に残った。

——コロソのパートナー ゆり君が教えてくれる、か。

「こんにちは」

吾輩の影が、やや長くなってきた頃。吾輩の城に入るものがあつた。

薄いながらも土の色をした服に身を包み、吾輩のそばまで歩みを進める娘。

「コツペ様、ちよつとお邪魔しますね」

鞆かぶとをテーブルの上に置いて眼鏡越しに我輩を見上げたのは、ゆり君だつた。

「やつぱり、ここは落ち着くわ」

テーブルの脇にある椅子いすを持ち上げると、吾輩の正面に置いて腰をかける。ふむ、珍しいな。テーブルからこちらを眺めるのが通例であるのに。

そう考えていると、ふう、と一息吐いた音。その音に押されるように、眼鏡のひとみが吾輩の顔を見上げてきた。

「コツペ様。あの子達つたら、私にファッションショー

に出ろ、なんて言うのよ」

ん？

いきなり話し始めたゆり君の顔を、吾輩はじつと見つめた。

「もちろん、桃華ももかといっしょだけど おまけじゃないの。あの子の目でわかつたわ」

んむ

じつと見ている吾輩の前で、ゆり君の頬がわずかに紅潮こうしゅうしていた。口調もやや早い。

「バッチリ似合う服を作る、なんて言つて、デザイン画を見せてくれて……あ、あんな可愛い服が、私に似合うと本當に思つてるのよ。あの子たちつたら、もう」

そうか

吾輩は、目を宙に向けた。

——見ているか、コロン。

そして、この世界のどこかに溶けている者へ向けて、声をかける。

——お主が命を賭して守りぬいた娘はいま、これほどの花を心に咲かせておるぞ 心だけでも来られるならば、吾輩のまなこを使って見るがいい。

「もう、こんなベタ靴じゃ恥ずかしくて え!？」

——手は貸せぬ。声も出せぬ。だが 吾輩のまなこならば、いつでも使うがいい。

「いまの感じ なに？」

——なに、遠慮は要らぬ。どうぞ、閉じぬまなこだ。

「コッペ、さま？」

問いかける言葉で、吾輩は我に返った。

（それが正しいかどうかは、ボクのパートナーが教えてくれるよ）

頭の中に、小さき友の言葉がよみがえる。

なるほど。ゆり君にとって吾輩は、『偉大な妖精』ではないのか。

「へんね、いま、いつものコッペ様じゃなかったみたい。まるで、コロ」

そうか。ならば、よいではないか。わが力など及ばずとも。

「気のせい、よね それでね、コッペ様——」

よいではないか。この笑顔が続くのであれば。

吾輩はそれで、十分満足だ。満足すべきなのだ。

ただすべてを、この閉じぬまなこにつつすだけで。

それから、陽光ががやや傾く程の間、ゆり君は吾輩に向かつて話しかけてくれた。

「——ふう。お話ししたら、すっかりしたわ。コッペ様、ありがとうございます」

話を要約すると、靴が問題らしい。吾輩にはゆり君の靴の何が悪いのかよくわからぬが、よく姿を借りるそら殿も服装につるさい者ではなかった故、

そもそもわかるはずもないか。

吾輩の言葉がゆり君に伝わらないのは、むしろよかつたのかもしれない。晴れ晴れとしたその顔を見て、吾輩はそう思った。

「さあ、それじゃあ靴を探しに行かなくちゃ。桃華なみには遠いけど、服に負けないくらい準備はしましょうか」

ひとつ強く息を吐き、吾輩に向かって軽く一礼すると、ゆり君は外へ向かって駆けて行く。

軽い足取り、踊るかの如き動き。その背中、会ったばかりのわが友を彷彿とさせる。

——そつだ、往くがいい。その二本の足で地を駆け、二本の腕で夢をつむぐがいい。それこそ、人の子たる所以。吾輩たち妖精はただ、それを見送るのみ

「そんな言い方しないの」

いきなり背中から現れた小柄な姿を見て、吾輩は息をついた。

「よい　しよつと」

ゆり君の座っていた椅子に腰をかけると、友の顔が吾輩を見上げてきた。

——わが友よ。ゆり君を此処へ寄こしたのは、お主だな？

「ええ、もちろんそうよ」

余計なことをする。わが友の悪いクセの二つめだ。

ゆり君も迷惑だろうに

「私だってね、うれしそうな顔が見たいのよ。あなたのそんな風な顔を、ね」

そう言つてにこにここと笑いかける友の顔に、吾輩は思わず、ありもしない鏡を探してしまった。

——他に、だれも居らぬな？

「つぼみはまだ部活動中よ。だいじょうぶ♡」

つぼみと言えば　ずいぶん、あなたにちからを使わせてしまったわね」

ん？ ああ、なにかと思えば、キャッスルでの戦いのことが。

——友の孫娘たちのため、友に代わって闘ってくれる者たちのためとあらば、どうということもない。

「ふふ。これがつぼみに聞こえたらね。きつと、あなたのことがもつと好きになるわ」

「可笑しそうにクスクスと笑う友の姿に、我輩はまたため息をつきたくなった。

ゆり君が元気になつてからというもの、いたずら好きが以前より増してきたようだな。

——我輩の言葉は、あの人の子には届くまい。この先もな。

「私には聞こえているでしょう？」

友の目が、覗き込むように我輩を見つめてきた。答えは知っておるであろうに。

——それは、我輩と友の間だけのことだ。今の我輩は『偉大な妖精』故、もう友は増えぬ。

我輩がそう言つと、友は何故か下を向いてひとつ

息をついて 再び上げた顔には、笑みが浮かんでいた。

「そういえばあなた、つぼみにはいつもと違う言葉遣いをしていたわね。空さんの言葉に、合わせてくれたのね？」

「ころころと話がよく変わるものだ。我輩は少しあきれ気味に思ったが、ゆり君も似たようなものか。

——あの娘からは、好意を感じた。好意は無為にできぬ。吾輩の力及ばず正体を露呈してしまい、

済まないことになったがな。

その瞬間、まっすぐ見上げる友の笑みが満面に広がった。

「ね。あなたはもう十分してくれているじゃないの。あなたのやり方で、みんなを見守ればいいのよ。

そうすれば、私の他にも聞こえるかもしれないわ。そのうちに、ね」

——彼等はすべて吾輩が庇護すべき者だ。今まで通り。何が変わるものでもあるまい？

我輩の言葉に、友は今度はふふ、と声を出して笑った。

「それじゃ、たまには私のことも見てちょうだい」
立ち上がり、椅子を片付けてこちらにやってくる友の言葉は、我輩にはやや不本意なものだった。

——吾輩はいつも見ているつもりなのだが？

「ええ。でもね、ちよつとは甘えたっていいじゃない」
我輩は透明な周囲を目で見回しながらしばし考えた。が、まあよいか。友の頼みだ。

——どれ、では望みの姿になるつか

「いいのよ、そのままです。それじゃ、ちよつとおなかを借りるわね」

うん？ 吾輩の腹が ああ、そうか。

「手も少し借りるわ。それじゃ、おやすみなさい」
——うむ。

普段は柔らかいこの腹。そこに体を預ける友の顔を眺め、我輩はわが身に感謝した。

「おばあちゃん♡ あら？」

陽光がかなり斜めに入り込む中、元気な声が我が城に響いた。

「寝ちゃってるわね、つぼみのおばあちゃん」

ふたりの若きブリキユアたちが我輩に近づいて、我が友を不思議そうな顔で見つめている。不躰にも見えるが

「コッペ様の体って、そんなに寝やすいんでしょうか？」

「ん。よし、実験してみよう！」

元気よく振り上げる手に反して、わが友を起こさぬよう無意識に小声になるあたり、咎める気は起きぬな。

「それってただ、えりかも寝たいだけなんじゃ」

「いいからいいから。細かいこと言わないで。仲間なんだもんね、コッペ様も。いいでしょ？」

——寝小便に気をつけてくれるならば、な。

「へ？ ちよ、ちよっと、この歳であたしがするわけないでしょー！ なにへんなこと言ってるのよ、つぼみつ!!」

「ひゃあ！ な、なんなのですか、いきなり！」
ん？

「あれ？ いまの、つぼみじゃないの？」

「わたしは、なにも言ってますけど なにが聞こえたんですか？」

ふむ

むっとした顔が我輩をちらりと見上げて、すぐかぶりを振ると、

「なんでもないっ！ おやすみつ!!」

「はあ なんなのでしょう??」

——そのうちに、か。

我が腹に寄りかかり、そのまま寝息を立てはじめ

る娘たちを見ながら、吾輩は知らず言葉を漏らした。
存外、友が増える時が来る日は近いのかもしれない。
ならばその時まで見つめよう。
どうせ、閉じぬまなこだ。

——おしまい——